

2011年度も折り返しとなった。3月11日を受けて始まったこの年度は、協同労働運動のこの10年間を総決算し、ステージを新たに作る転換の時であることを実感させられた半期だった。

FEC(食べ物・エネルギー・ケア)自給コミュニティという地域戦略、社会連帯経営という経営戦略、3本部体制という組織戦略が重なり合って、協同労働運動の総合戦略が形成されようとしている。この戦略に不可欠なのが、協同労働の協同組合法・コミュニティ就労と事業を推進するための条例・公的訓練・就労制度という三つの社会システムを創造する制度戦略である。協同労働運動の総合戦略とは、「地域」「経営」「組織」「制度」という構成からなる、「協同の公共戦略」ともいえる。

今年度から、東京統括本部の責任者も兼務することとなり、「グローバル東京」の到達点を踏まえ、全国の総合戦略を牽引する、新たな「東京ローカル」の創造を模索する毎日である。その中で、FEC自給の現実味が薄い東京で、1,000名を超す組合員の家庭から、1滴残らず廃食油を集めよう、という提起をしたところ、思いのほか興味と共感を呼んでいる。千葉県や宮城県で展開する「BDF事業」の展望も含め、「FECを生活から運動化する」呼びかけである。また、近隣にも声をかけ、地域の孤立する集合住宅の高齢者を訪ね、油を集める行為が人と人の関係づくりの契機とな

り、「協同で物をつくり、協同で物を利用する」「私の成果を他人が利用し、他人の成果を自分が利用する」コミュニティづくりの道が拓けることを期待したい。

全国的にも、「FEC」は仕事おこしと社会連帯の合言葉として定着しつつある。しかし、実践はこれから。中身を思案する秋から冬になるだろう。間もなく「全国よい仕事研究交流集会」が開催されるが、各地域の集会も、「仕事おこし」が最大のよい仕事のテーマとなった感がある。しかし一方で、地域の必要に応えるというだけでは見通しきれない課題、持続可能性や運動としての仕事おこしを現実化するための「経営」問題を、今一度深める必要がある。その鍵を握るのが、「実感ある経営」。実感とは、責任と可能性を実感するということであり、「何のための経営か」を実感することである。これは、物事の本質に適った観点の強化といえる。「協同組合の本質」「働くことの本質」「コミュニティの本質」といった観点を育む学習・研修の機会が必須になってきた。折しも来年は国際協同組合年である。11~12月の「組織整備・強化月間」を通じて、人の強化と観点の強化を図っていきたい。

菅野元理事長が亡くなられ、来年1月で4年。国際協同組合年に、協同組合の本質を歴史的かつ社会的に語れる人材の希少に、無念が募る今日この頃。せめて、この希少な役割を担う次世代に望みを託し、秋から冬の本質をめぐる強化に挑戦したい。